

# 天上の愛、地上の愛

河 野 豊

## はじめに

我々は今「愛」という言葉を簡単に口にす。映画やテレビドラマ、小説には「愛」を主題としたものが溢れている。そして、時には「永遠の愛」、「普遍的な愛」、「愛は不変」などと言ったりする。まるで「愛」という言葉が表すものが人類が誕生してから不変であり、古今東西同じものであるかのように漠然と考えている。しかしはたしてそう言えるのだろうか。2500年前の「愛」と現代の「愛」とは同じものなのであろうか。

小論の目的は、2500年前から現代に至るまでの「愛」という言葉の歴史、また、「愛」の歴史とでもいうものを概観し、上記の問いに答えることである。

## 1

まずはじめに、ヨーロッパの文化文明から考えていくことにしよう。ヨーロッパの文化文明の精神的基盤は2つの思想から成っているとされる。すなわちヘレニズムとヘブライズムである。この2つの言葉を初めて対比的に使ったのは19世紀イギリスの評論家であり詩人であり教育者でもあったマシュー・アーノルドである。彼は次のように述べている。

ヘブライ主義とギリシア主義——これらの勢力の二点間をわれわれの世界は動いている。世界は、ある時期においてはそれらの一方の引力を、他の時期においては他方の引力を、より強く感じる。そうして世界は、両者の間で均等に軽重なく平衡せられるべきものである、現実において決してそうなっていないけれども。<sup>1</sup>

ところで人間精神は、ヘブライ主義とギリシア主義、人間の知的衝動と道徳的衝動、事物を如実にみようとす努力と自己克服によって平和を得ようとす努力、の交代によって進んでゆく。そしてこれらの二つの力のおおのは、その定められた全盛期間と支配期間とをもつ。キリスト教の偉大な運動が、ヘブライ主義と人間の道徳的衝動との勝利であったように、リナセンス[ルネサンスのこと。引用者]の名でとっている偉大な運動は、人間の知的衝動とギリシア主義との興起と復位であった。<sup>2</sup>

アーノルドが以上のようなことを言う前から、先述したように、ヘレニズムとヘブライズムとが、ヨーロッパ文化、文明を形成してきた2大思想として考えられるようになった。アーノルドによれば、これら2つの思想はともに人間の完成、人間の救済を究極の目的としている。

では、そのヘレニズムとヘブライズムにおいて、「愛」はいったいどのようなものとされていたのであろうか。

ヘレニズムにおける愛を考える場合、神話をまず取り上げなければならない。「ギリシア・ローマ神話」とひとくくりにして言われることが多いが、その神話では、神々がたくさんいて、人間とは別に好き勝手なことをしていた。人間はただ天上を仰ぎ見て、憧れるのみで、神々は地上の人間のことは大して気にもとめていなかった。つまり、神々は神々、人間は人間というわけである。

そして一方、人間は天上に憧れ、美そのもの、完全なるもの、善きもの、を永遠のものとしてもつことを願っていた。地上の人間が持ちたいと願ったものは、彼らには持ちえないものであり、簡単に言えば、そういうものへの「憧れ」、「求め」の過程が「恋」、「エロース」として表現されていたのである。それは、別の言い方をすれば、自分の持っていないものへの欲求であり、最終的には、「一者」への合一を願うことになることである。

また、天上への憧れということから考えると、人間の思いというベクトルの向きが地上から天上へと向かっているということになる。

自分に欠けているものを求めるということを、プラトンは、『饗宴』における次のような寓話（ミュトス）で表現している。

さて、その昔人間本来の姿は今日見られるようなものではなく、それと異ったものであった。すなわちまず第一に人間の種類は三種だった。今日男、女二種類であるのとは違って、第三のものがさらに加わっていたのである。この第三のものは男女両性を合せ持つもので、その名前は現在残っているが、そのもの自体はすでに消滅してしまっている。つまりその当時は（アンドロギュノス）というのが一種をなして、容姿名前とも男女両方からできていてそれらを合せ持つものであったが、今日残っているのはただ悪口の中に使われているその名前の方だけである。第二に、これら三種の人間の容姿はすべて、全体としては球形で、りはぐるりと背中と横腹でできていた。また手を四本、足も、手と同じ数だけ持ち、二つの顔を丸い首の上に持っていたが、この二つはすべての点で同じようにできていた。<sup>3</sup>

さて、このような人間たちは、強力でおごり高ぶり、神々に刃向かったので、ゼウスは怒って次のように言う。「わし」というのはゼウスのことである。

『わしには一工夫できたように思えるのだ。つまり、どうすれば人間どもが存続しながらしかも今より弱くなって、その我儘をやめるだろうかということのね。それはこうだ。今度のところは彼らを一人ずつ、二つに切断しようと思う。そうすれば今よりも弱くなるだろうし、同時にまた、数を増すからわれわれにとっていっそう役に立つものとなりましょう。そして彼らは二本足

で真直ぐに立って歩くことになるであろう。しかし、それでもなお彼らが傍若無人の振舞いを続け、おとなしくしている気持がないように見うけられるなら、今一度二つに切ってしまう。そんなことになれば、彼らは一本足でびよんびよん跳びながら進むことになるわけだ』と。

(中略)

まことにそんなわけで、このような大昔から、相互への恋（エロース）は人々のうちに植え付けられているのであって、それは人間を昔の本然の姿へと結合するものであり、二つの半身を一体にして人間本来の姿を癒し回復させようと企てるものである。<sup>4</sup>

欠けてしまった半身を取り戻し、本来の姿を求めること、一つになろうとすること、これがプラトンのいう「愛」（エロース）（erōs）である。こうしてみるとエロースとは一つになろうとする欲求だと言ってもよいと思われる。そして人間の魂が一つになろうとするものは何かと言えば、それは「一者」である。言い換えれば、一切がそこから流れ出た「始源」とされるものなのである。

従って、プラトンの恋愛、いわゆるプラトニック・ラブというのは、現代では、肉体関係を伴わない精神的な恋愛という意味で捉えられているけれども、本来は肉体関係の有無などは関係ないのであった。肉体関係があろうがなかろうが、互いを高め、善きもの、完全なるものを目指すのであれば、プラトニック・ラブと言って差し支えないのである。

魂は「一者」への合一を願うと前述したが、肉体という滅ぶべきものをまとった人間は、肉体が言わば魂を閉じこめる牢獄となって、一者への合一を妨げられる。だから、地上において肉体的生活を続けている限り、神的なものとの一体化は不可能である。肉体がある限り魂は始源へと帰っていくことはできない。人間がこうした状態で始源へ帰ることを求める時に必要なのは肉体をなくすことであった。肉体をなくすというのは、簡単に言えば死ぬことであり、プラトンの「哲学することは死の練習である」という言葉はそういう意味である。

究極の愛は死ぬことであるとしばしば言われるのは、こうしたプラトニックな考え方から来ていると言っていると思われる。「愛」が「死」に結びつくというテーマは、ヨーロッパ文化の中で大きな位置を占めているが、それを端的に表しているものが、トリスタンとイゾルデの伝説である。

## 2

それでは、一方、ヘブライズムはどうであろうか。

ヘブライズムというのは、簡単に言えば、ユダヤ・キリスト教思想のことである。その特徴は何かと言えば、唯一神、人格神を絶対者と考えることである。

ヘレニズムとは違って、神はただ一人（厳密に言えば「一人」という表現はおかしいが）しかいない。そして人間はその神が作ったものであるから、それゆえに神は人間を愛するということになる。キリスト教が愛の宗教と言われるのは神が作った人間を愛するという意味である。この神の愛はギリシア語でアガペー（agapē）である。アガペーとしての愛はエロース（erōs）とは根本的に異なる。「エロース」が欠けているものへの欲求、究極的には一者への合一を志向するものであった、言い換

えれば、ベクトルの向きが地上から天上に向かっていたと言えるのに対して、アガペーの愛は神の愛であるから、ベクトルの向きは正反対で、天上から地上へ向かうことになる。

さらに、神の愛を形にすること考えたとき、人間はどうしても神と交わることはできないので、神と人間を仲介するものとして、神は神の子であるイエスを人間の肉体をもって地上に遣わされた。だから神と人間との「無限の隔たり」の間にイエスがいるわけなのである。そのことが神の愛の証明となっている。神の愛は天上から地上の人間へと向かうものであり、その神の愛があつてこそ始めて人間は隣人を愛することができると言えよう。なぜなら隣人にも神の愛が注がれているから。

以上、簡単に見てきたように、ヘレニズムとヘブライズムという、ヨーロッパ精神を形成している2大思想というのは、実は正反対の方向に向かうベクトルを持つ「愛」によって特徴づけられている。そして、これら2つの「愛」がそれぞれエロースとアガペーと表現される。<sup>5</sup>

ヨーロッパの歴史とは、これら2つの精神が交互に強まったり、弱まったりする歴史だと言っても過言ではないと思われる。それはアーノルドの引用の通りである。

### 3

次に、紀元後4、5世紀からルネサンスに至る中世までの千年間において、優勢となっていたヘブライズムにおける愛について、つまり、キリスト教における愛について、さらに考えてみたい。

以下は新約聖書の中のパウロの書簡、普通「愛の書簡」と呼ばれているものである（下線は引用者）。

- 1 Though I speak with the tongues of men and of angels, and have not charity, am become as sounding brass, or a tinkling cymbal.
- 2 And though I have the gift of prophecy, and understand all mysteries, and all knowledge; and though I have all faith, so that I could removemountains, and have not charity, I am nothing.
- 3 And though I bestow all my goods to feed the poor, and though I give my body to be burned, and have not charity, it profiteth me nothing.
- 4 Charity suffereth long, and is kind; charity envieth not; charity vaunteth not itself, is not puffed up,
- 5 Doth not behave itself unseemly, seeketh not her own, is not easily provoked, thinketh no evil;
- 6 Rejoiceth not in iniquity, but rejoiceth in the truth;
- 7 Beareth all things, believeth all things, hopeth all things, endureth all things.
- 8 Charity never faileth: but whether there be prophecies, they shall fail; whether there be tongues, they shall cease; whether there be knowledge, it shall vanish away.

....

13 And now abideth faith, hope, charity, these three; but the greatest of these is charity.<sup>6</sup>

- 1 たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどころ、やかましいシンバル。
- 2 たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。
- 3 全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。
- 4 愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。
- 5 礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。
- 6 不義を喜ばず、真実を喜ぶ。
- 7 すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。
- 8 愛は決して滅びない。預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れよう、  
(中略)

13 それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。<sup>7</sup>

新約聖書はコイナーと呼ばれるギリシア語で書かれていて、上記引用はその欽定訳聖書からのものである。欽定訳というのは、the Authorized VersionあるいはKing James Versionと呼ばれているもので、ジェームズ1世の命令で英訳されたものである（出版は1611年）。それに対して旧約聖書はヘブライ語で書かれている。従って、旧約がギリシア、新約がヘブライなので、キリスト教の聖書とは、アーノルドの言った、ヘレニズムとヘブライズムとを端的に表現したものと言える。聖書を核とするキリスト教がヨーロッパに及ぼした巨大な影響を考えれば、ヘブライズムとヘレニズムの影響の大きさが実感できるであろう。

上記の英語の原文において下線をつけたcharityという語であるが、この語の元のギリシア語はagapēである。ここで注意しておきたいのは、アガペーというギリシア語を英語に訳すときに、loveを使わずにcharityを使っていることである。さらにその日本語訳を見るとそれは「愛」となっている。これはどういうことであろうか。一般にerōsは普通loveと訳される。それは性愛の意味になることが多い。つまり、erōsが、最初に述べたように、「一つになること」の意味であるので、それは男女が一つになることも表してしまうのである。このように、キリスト教の神の愛は決してerōsではなくagapēである。従って「愛」は「愛」でも、性愛を表してしまうloveではなくcharityを使っているのである。charityの語源はラテン語のcaritasで、「神の愛」「慈悲」「慈善」という意味で、cherishという語と同じ語源である。

上記引用の中のcharityは第一に神の愛であり、それは慈悲のことである。そして、また、第二に人間同士の愛のことでもある。先述したように、神の愛があるからこそ、人間同士の愛が成り立つと

ということになるのである。

こうした「愛」の観念の中で、中世ヨーロッパの人々は生きていた。中世ヨーロッパでキリスト教が大きな影響力を持っていたのは、一つには、教会と国家が一体のものであったという歴史的理由による。そしてこうした教会による支配を支えたものがスコラ哲学である。スコラ哲学とは、簡単に言えば、キリスト教とアリストテレス哲学との融合であるため、ギリシア的なものもあったとは言え、どちらかと言えばヘブライズム優勢の時代だと言ってもよいであろう。そしてそういう状態はルネサンスまで続いたと言えるだろう。

そのルネサンスの時代に、アーノルドの引用にもあるように、今度はヘレニズムが復権する。アーノルドの言葉を借りれば、「興起」と「復位」である。いわゆる近代の幕開けと一般に考えられた時代である。

以上、述べてきたように、中世のヨーロッパはキリスト教社会であった。「キリスト教的社会有機体」という言葉を使う人もいる。その社会においては個々の人間、すなわち個人というものがなかったと言ってよい。それに対してルネサンスに始まる近代化とは、「人間」の出現、「個人」の出現と言ってよいであろう。そしてそのルネサンスは要するに「人間万歳」の時代である。天上の神へと向かっていた愛、あるいは天上から地上へと向かっていた愛が、地上から同じ地上の人間へと向かう時代であり、簡単に言えば世俗化である。ある人の言葉を借りれば、神が「棚上げ」されたとも言えるのである。<sup>8</sup> つまり、人間は人間だけでやっていくという時代になったのである。こうした「人間」を強く意識する時代になってくると、また、男女の結びつきを扱う詩や劇が増えてくるようになる。しかもそこでは家や土地という制度の下にあった男女が、むきだしとも言える形で外に出てきて、個人として結びつくようになるのである。状況が現代に近づいてきたと言ってもよいであろう。シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』は、過渡期にあるそういう状況を端的に表したものだだろう。

英文学において、愛と結婚を主題とした作品しか書かなかったと言ってよいジェイン・オースティンの時代、すなわち19世紀初頭になると、状況はますます現代に似たものとなる。

A lady's imagination is very rapid; it jumps from admiration to love, from love to matrimony, in a moment.<sup>9</sup>

「御婦人の想像はとても速力がありますからね。あっという間に、賞讃から恋へ、恋から結婚へと飛躍しますんでね。」<sup>10</sup>

"I speak nothing but the truth. He still loves me, and we are engaged."

...

"And do you really love him quite well enough? Oh, Lizzy! do anything rather than marry without affection. Are you quite sure that you feel what you ought to do?"

"Oh, yes!"<sup>11</sup>

「わたし、うそなんか言わないわ。あの方は今でもわたしを愛してるのよ。そして、二人は婚約したのよ。」

(中略)

「わたしたちは、どうせだめだろうと思って、そう言ってたのよ。でも、あなたはほんとうにそれほどの愛を感じてるの？ おお、リジー、愛のない結婚だけはしないでちょうだい。あなたは、結婚するだけの愛を感じてるという自信があつて？」

「ありますとも！（後略）」<sup>12</sup>

「愛しているから結婚する」という主人公エリザベスのセリフは、現代的ではあるが、留保も必要である。エリザベスの相手ダーシーは大地主であり、資産家であった。中産階級の女性であるエリザベスにとっては、いわゆる玉の輿である。もしもダーシーが無一文なら最初から結婚相手とは見なされなかったであろう。結婚相手の男性に財産があるのは当然で、財産に愛が追加されたと考えた方がよいと思われる。

#### 4

ここで、日本における「愛」との差異を見てみたい。日本では、「愛」という言葉は、元来仏教用語で、「愛執」、「愛欲」を意味した。従って、ヨーロッパにおいてギリシア語で神の愛を表すのに、*erōs*ではなくて*agapē*を用いたのと同じようなことが日本でも起こった。つまり、キリスト教が日本に入ってきた時、*love*は、「愛」ではなくて「大切」「御大切」と翻訳されたのである。

しかし、明治時代以降、キリスト教の*love*は日本語の「愛」と同一視された。これはどういう理由によるのだろうか。例えば、ヨーロッパの文物を輸入するのに急であった明治時代の風潮に対して、夏目漱石は「木に竹を接いだよう」と評している。この漱石の言葉こそ、明治時代の新しい言葉の傾向について正鵠を射るものと言えよう。それは日本人が情緒として持っていた心情表現としての言葉に関しても同様なのである。それについて伊藤整の批判がある。彼は、背景としてのキリスト教を持たない日本人が「愛」という言葉を使うとき、同じような齟齬が生じると指摘した。

(中略) 信仰による祈り、懺悔などが無い時に、夫婦の関係を「愛」という言葉で表現することには、大きな、根本的な虚偽が実在している。<sup>13</sup>

明治以来、我々が取り入れた西洋文学の恋愛の思想は、このようなキリスト教の宗教生活の中でのみ実践性があるものである。それを我々はその実践性、願望や祈りや懺悔などを抜きにして、形の上でのみ、疑うべからざる最も合理的で道徳的な人類の秩序の考え方として受け容れている。<sup>14</sup>

だから男女の間の接触を理想的なものたらしめようとするとき、ヨーロッパ系の愛という言葉を使うのは、我々には、踏われるのである。それは「惚れること」であり、「恋すること」、「慕うこと」である。しかし愛ではない。性というもっとも主我的なものをも、他者への愛というものに純化させようとする心的努力の習慣がないのだ。

以上のような心的習慣を持つ東洋人中の東洋人たる日本人が、明治初年以來、「愛」という翻訳言葉を輸入し、それによって男女の間の恋を描き、説明し、証明しようとしたことが、どのような無理、空転、虚偽をもたらしたかは、私が最大限に譲歩しても疑うことができない。即ち、人類愛、ヒューマニズムという言葉も同様である。<sup>15</sup>

上流階級の夫人と森番との激しい愛を描いたロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』を翻訳し、猥褻罪に問われた伊藤整が、上記のように翻訳言葉の「愛」を糾弾するとき、そこには、明治時代以降、日本人が言葉に対して無批判な受け入れてきたことへの反発が彼の中にあっただけと言えよう。

我々は、そうした明治以降の翻訳言葉の受容において、あまりにも無自覚に、言葉そのものの背景も考えずに使ってしまったのではないだろうか。

### おわりに

英文学者であり、漢学の素養もあった漱石は、『三四郎』の中で、登場人物に“Pity's akin to love”の訳として、「可哀想だた惚れたつて事よ」と言わせている。彼にとって、loveは「愛」ではなく、「惚れ」ることだったのである。漱石の時代の日本人のこういう言語感覚は、その後、ヨーロッパからの文化の大きな波を受けて、日本人の感性そのものまで変えてしまっているのではないか。

小論の冒頭で述べたように、日本では恋愛を描いた小説、テレビドラマが巷間に溢れている。それだけ日本がヨーロッパ化したということかもしれないが、ヨーロッパの「愛」の歴史について概観すると、その「愛」は、ヨーロッパの人々が思い描く「愛」と同じ歴史をたどってきたものではないことがわかる。長く続いてきた言葉の重みを考えるとき、我々の周りに溢れている「愛」の本質というものを再考することが求められていると言えよう。

### 注

<sup>1</sup> マシュー・アーノルド著多田英次訳『教養と無秩序』（岩波文庫、1965改版）、p.162.

引用文では「ヘブライ主義」「ギリシア主義」となっているけれども、英語の原文は、それぞれ、'Hellenism'、'Hebraism'で、「主義」と訳すよりも「精神」と訳した方がいいようにと思われる。Helleneというのはギリシャ人のことである。

<sup>2</sup> 同書、p.174.

<sup>3</sup> プラトン「饗宴——恋について」189D-190、鈴木照雄訳『プラトン全集』第5巻（岩波書店、

1974)、p.47. 副題が「恋について」となっているが、これは男女の恋だけのことではない。

<sup>4</sup> 同書、190C-190D、p.49.

<sup>5</sup> 本文中で述べたエロースとアガペーという2つの「愛」の他に、ギリシア語には「愛」を表す単語がもう一つある。それは、ピリア (philia) で、普通は「友愛」と訳されるものである (philosophyのphiloはその変形)。

<sup>6</sup> The First Epistle of Paul the Apostle to the Corinthians, Chap.13.

<sup>7</sup> 新共同訳「コリント人への第1の手紙」第13章。

<sup>8</sup> 村上陽一郎著『近代科学と聖俗革命 (新版)』(新曜社、2002)、pp.32-5.

<sup>9</sup> Jane Austen, *Pride and Prejudice* (Penguin Books, 1996), p.26.

<sup>10</sup> ジェイン・オースティン著富田彬訳『高慢と偏見』上巻 (岩波文庫、1950)、p.44.

<sup>11</sup> Austen, p.301.

<sup>12</sup> オースティン、前掲書、下巻、pp.244-45.

<sup>13</sup> 伊藤整「近代日本における愛の虚偽」、『近代日本人の発想の諸形式』所収 (岩波文庫、1981)、p.143.

<sup>14</sup> 同書、p.143.

<sup>15</sup> 同書、pp.144-45.

付記 本稿は、「愛」をテーマとする2002年度別府大学公開講座における講演に加筆修正をしたものである。